
EScaPE

MI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ESCAPE

【Zコード】

Z6973F

【作者名】

MITI

【あらすじ】

機械を造るのが好きな、大学一年生の少年。常に面白い事を考えている楽天家の彼は、ひょんなことから危険な仕事を任されてしまう。運ぶものは、核弾頭用の光学迷彩機能。彼を追う人物は世界中に溢れ、誰が敵か見方かわからなくなつてくる。しかし、どれだけ逃げていても、彼の運命は、すでに掌握されていた。

プロローグ

太陽がいつになく眩しい。手を翳して影をつくってみても、その光は抑さえられそうになかった。これは自分の心の現れだらうか？ふと、頭にそう浮かぶ。

無理もない。何故なら俺は今日、これから、恐らく空前絶後であろう試みに挑もうとしているのだから・・・。いつも通り、学校への道を闊歩する。俺は公立の大学に通う2年生。ついでに言うと、勉強には受験以来手をつけてない。ただひたすら、自分の趣味の道を突き進んできた。

そして、駅に着く。

「ん~、よし。始めるかな」小さな伸びをして、勉強道具の入った鞄とは別の一回り小さな袋から、それを出す。

「今日もよろしく頼むぜ、モリー」

手に持つたそれ、灰色のローラーブレードに声をかけた。
何を隠そう、俺の空前絶後の挑戦、それは、このモリーが主役とも言える。

人の行き来が、まだそれほど減つていない朝の時間。それほど盛んな町ではない割に、この駅を利用する客の数には、主要駅顔負けの数を誇っていた。俺は人の波を搔き分けて、路面の見える位置まで、どうにかしてたどり着いた。そして左右を見回し、ある人物を探す。この駅の車掌さんだ。

「つたく、どこいったんだよあの爺さん...電車来ちまつよお
焦りのあまり、手にうつすらと汗をかく。車掌さんの姿は、ここから確認することができなかつた。

「まもなく、一番ホームに、久遠町行きの電車が、到着いたします

・・・

「やつべ、間に合わなくなる！」

アナウンスが、電車の到着を知らせる。必死になつて、周囲を見回した。しかし、人の波の後ろにいるのか、未だその姿は確認できなかつた。

「ん～～～あ～～～！もう！」

自棄になる気持ちを抑えつつ、深呼吸して、駅に入ろうとしている電車と自分の位置とのある程度の距離を測る。

「……一昨日から言つてあつたから、平氣だよな……な、モリー」答えてくれないのは分かつているものの、何かに同意を求めないとどことなく淋しいのだ。

「いや、行こう」

履いている革靴を脱ぎ、お気に入りの靴下を人目に晒すことなく、俺はモリーに履き替える。

「ふう、行こう」

電車がホームに入つてくる。後数秒で自分の前に到達するだらう。

周りから驚きの喚声が上がつた。もちろん、俺の行動に、だ。

モリーを履いた俺は、そのまま線路の上に飛び降りたのだ。電車が警笛を鳴らすため、余計に目立つてしまつてるのは、ちょっとした手違ひなのだが……。とりあえず、俺の計画はこれからだ。

「よし、頼むぞ～モリー、昨日みたいに動いてくれよ」

間近に迫る電車を背に、少し屈んでモリーに手を伸ばす。ホームからは、当然、危ないだとか、逃げるだとか、手を合わせて揉んでいる人までいる。へつ、死んでたまるもんか。

モリーの外側の面、ちようどくるぶしの辺りに取り付けられた、薄く緑に光る円形のものを押す。

カチッという音と共に、小さなモーターが回転する音が聞こえた。

「モリー、GO！」

前方に伸びる線路を見据え、そう呟いた。“音声自動認識システム

”俺の親父が作った、なんともハイテクな機械だ。店で卖っている

ものもあるが、それよりもはるかに小さなエージが組み込まれているのが特徴だ。

俺の声に応え、モリーのモーターが急速に回転する。線路からの高圧電流のおかげで、モリーは十分に充電されていた。半導質のタイヤが、路面との摩擦で白い煙を上げる。軽く足を前に出してみた。

「ん、ぬお！」

猛烈な速さで発進する。その急激なGに一瞬よろめいたが、すぐに体勢を立て直す。

見事に、線路の上を走っていた。時速はおよそ65キロほどであろうか、十分速い。

ちなみに、この細い線路から落ちないのは、レールに流れている電流を感知して、そこからレールの中央に常に乗つていられるようにしてあるためだ。

「……やつた……やつた——成功だ！俺スゲー！」

線路の上を激走して、大きな歓声を上げた。

「つづつづくーー！やべーー！笑いが止まらない。これで簡単に学校行けるぜ」

風に靡く髪の毛を押さえることなく、実験成功の余韻に浸っていた。

「あとは、学校に行つて……あれ、でも……どうやつて止まるんだ……ああ、電源切りやいいか」

「んでも、そうすると……電流が直接自分にくるのは確実……

「うわーー！考えてなかつた！」

しかし、この挑戦はどつにか成功のようだった。確定した成功ではないが、それでも、こんなことを考えた人間は、いたにしても実行したのは俺が始めてだ。

でも、この成功が後に、あんなことに巻き込まれる引き金となつているなんて、微塵も思つていなかつたのだ……。

「いてて」頭にできたこぶと、思いつきり打ち付けた膝をこすりながら、少年が椅子に座った。

ここは、山間部に位置する小さな短期大学だ。基本的に服装は自由。そのため、少年は高校のときの白いワイシャツを、しわが取れなくなるぐらいにまで着ていた。

「姫、今度はなにやつたんだ」

「だから名字で呼ぶの止めるって言つてんじやねーかよ。俺の唯一の羞恥の場所なんだからさ」

隣にいる、少年よりはどことなく大人の雰囲気が漂う青年が、あきれた顔で話しかける。

「いいじゃん。姫乃 捺伎なつきって、どこで呼んでも女っぽくなるンガツ！」

「黙れ」

少年、姫乃捺伎が、手に持っていたローラーブレード、モリーを投げつける。それは、見事に青年の顔に当たった。

「今日はこいつで、駅からの時間短縮やつてみたんだけどよ……」

「ぜ、前回自転車でやつてたやつか？」

青年は鼻を押さえていた。

「ああ、今回は通学路工事中でさ、仕方なく線路を使ってみたんだよ」

「そしたら、電車にはねられた！」

捺伎の答えは右アッパー。見事に青年の顎を捕らえていた。

「そしたら今生きてる俺はなんだよ

「……かつ」

未だに顎を押さえながら悶絶している青年を尻目に、捺伎が話を進める。

「いつものあの駅のホームに上れなかつたんだよ。んで、仕方なくジャンプしてみたら

これが見事に成功してさ」

「んならいいじゃねえか。怪我なんかする要因がねえな」

「まあ、最後まで聞けよ。よつと」

背負つていたリュックを椅子の下に置く。ガシャと小さな音がなつた。

「物理の慣性つてあるだろ。あれで、そのままの勢いで自販機に激突。おかげでこのやまだ」

「あほだな」

青年が鼻で笑つて、正面を向いた。

「んだよ、別にいいだろ、好きでやつてるんだから」

「ま、止めはしないよ。ほら、教授は言つてへるぞ」

二人がノートを出す。

周りの生徒達も、教授が入つてくると、静かになった。

「…」

捺伎は何か考え込むように眉を顰めながら、教授を見る。

そして、授業が始まった。

一章への狭間（前書き）

これは、単に一章と一章を繋ぐ、いわば無くてもいい話です。
読み飛ばしても結構ですが、読むとより良いかと

一章への狭間

「では、今日はここまでにします」

教授が講義を終えると、学生たちに活気が戻った。

「姫つち、次は何取つてる?」

青年が教材を片付けながら、隣で半覚醒状態にある捺伎に聞く。

「ふあ」

大きな欠伸を一つして、青年を一瞥する。

「俺、今日は帰るわ」

「そうか、かえ…は?」

「こいつの改造とメンテしたいからさ」

鞄からモリーを出し、青年に見せた後、それを地面に置いた。

「いや、帰るつたって、お前この後何も無いのか?」

自分の準備を終え、リュックを背負い、捺伎の頭をバシバシ叩きながら聞いた。

「あるよ。大河内教授と霧暮教授の一いつ…つて叩きすぎだボケ!」

青年の前に人差し指と中指の腹を向け、そのまま目潰しをした。

「別に問題ないだろ」

捺伎が続けた。

「俺さ、さつき考えたんだよ。どうすればここいつでここまで楽に来れるかって」

「んで、答えは見つかったのか?自転車のときも似たような事言ってたぞ、お前…」

一人とも片付けを終え、椅子から立ち上がる。

「ああ、聞いて驚くなよ」

靴とモリーを履き替えながら、捺伎が笑顔で青年を見た。その笑顔にはどこと無く、無邪気な子供のようなものが伺える。

「「」いつをホバーにする」

履き替えた靴を、先ほどまでモリーが入っていた袋へとしまつ。

「……」

「どうよ」

捺伎が堂々と胸を張つた。その体重移動で、微妙に後ろへと動いた。

「いや、どうつて言われても」

「何が不満なんだよ。完璧だろ。作るぜ、ホバー」

「だから、そのホバーつて何？」

呆れた顔で、青年が捺伎を押した。

「おおー！ つとつとつと。危ねーだろ！」

6、7メートルほど動いて、停止した。そして、その場所からモリーを起動させ、猪突猛進の如く青年に激突した。

「いいが、ホバーつてのは、つまりは空気でものを浮かすことだよ。ほら、ホバークラフトとかあるだろ。あれと一緒に」

通路の隅まで飛んでいった青年の耳元で、捺伎が語る。

「俺の体重とモリーの重量、そこに重力との釣り合いがある。これよりも強い力で地面を押せば、とりあえず地面からは浮かぶ。小学生にでもわかる簡単な理論だ」

人差し指を立て、ニッと笑う。

「ここからが違う。浮力と釣り合つだけじゃ何もならない。ようは、それよりも大きな圧力を長時間噴出可能なエンジンが必要なんだよ」

青年は未だ伸びていた。しかし、話の半分くらいなら聞こえている……だろう。

「そのエンジンをどうするか考えてたんだけどさ…………」

その後、捺伎の話は三十分に渡つた。

「んじゃ、後の事よろしくな」

話をしている間ずつと伸びていた青年に手を振る。

モリーの電源を一旦落とし、ただのローラーブレードとして履き、校門に向かつた。

「さてと、帰りますか」
キャンパスと世間との狭間、ちょうど校門のところで、捺伎が誰に
言つても無く独り言を呴いた後、モリーの電源を入れた。

一章（前書き）

一章から來ても構いませんが、一章の狭間も読んでいただけないと、よりわかると思います。

「……」ひひひ。対象を肉眼で確認
男が手に持ったトランシーバーを口元に持つて、小声で話して
いた。

耳に付けたイヤホンと繋がっているため、会話は聞こえない。

「現在、予定時刻よりも、約4時間程のずれ、ひかりの天気は快晴
となつてあります。

座標は135・60・36……詳しく述べは後ほどデータを送ります」

ポケットから、トランシーバーよりも一回り小さな機械を取り出す。
どうやら高機能携帯端末（P.I.D）のようだ。

「後をつけますか……」了解です。予想される進路は、全1137
通りの内……

449・586・1103が良いかと……はい……了解致しました」
捺伎を一瞥して、男はトランシーバーをしました。

「……まつたく、あのお方は忙しいんだか暇なんだか……自分でやるう
と思つのはあのお方だけだ」

そう思って、男は捺伎と反対の方向へと歩き出した。

「ん~つと……必要な部品は……はとんど親父が持つてゐるから……」
独語を言いつつ、鞄の中身を揃える。

「うしつ、行くか！モリー」

すでにモーターの温まつたモリーに手を伸ばし、回転数を確認する。

「あり？…朝は駅までの時間で足りてたんだけどなあ……まだ完全に回りきつてなかつたか…」

腕組をして、少し悩む。

「ま、いいか」

重心を前に移動させ、ゆっくりと進んだ。

まだ昼には早いが、朝とは言えない微妙な時間帯。そのせいが、人通りは少なかつた。

普段は狭い歩道を、悠々と滑走する。

車もそれほど見られない。

静かだつた。

「…線路はまた次回にして、普通の道で行くか」

進行方向を180度変えて、登校時とは別の方へと走り出した。

「…」れでやつと5人揃つのか…」

青空を飛ぶ一台のヘリコプターがあつた。

下に広がる景色は海、近くに見えている陸までも、まだ距離があつた。

「後どれくらいで着くんだ…」

男が、インカム越しにパイロットと話している。着ている服はスーツのようだ。

『10分で目標圏内に入ります』

ヘリの轟音に混じつて、声がした。

「急げよ、奴らも狙つている…私の構想にミスがあつてはならないのだ。 バラカラム

確実に時間通りに着け」

『了解しました』

「あれを渡したら、次は我々の姫君との出会いいか…」

隣に座るもう一人の男が話しかけてきた。

四日後、早いものだな。

姫の鬱武者と云ふ。また著者物たかなか。

「ああ、分かつてゐるさ」

二人とも、正面を向いたままで、お互の顔を見ようとせずに話していた。

「ヤツホう！」

下り坂を、車よりも早く走る影があつた。

もちろん、現在こんなことができるのには一人だけ、捺伎である。

俺スゲー

強烈な向かい風に暴れる髪を押さえ込むことなく、坂を下りきり、十字路を曲がった。

「これなら、駅使うのと同じか……いや、計算だとまだかかるから……あつても4分の差か……」

ああそういうや... 雨の日どおすつかな... こいつじゃ滑るし、ホバー
も水巻き上げてそのまま壊れちまう... 参ったな」

クラクションを鳴らす車やバイクを無視して、道路を走る。

もちろん、車線と道路交通法、道路標識は守っている。

警察に目を付けられたら、それこそこの実験の意味はなくなるのだ。

「ま、後でいいや」

黄色になつた信号を、ぎりぎりで曲がり、そこから歩道に入った。スピードを緩め、そして止まる。

「…うし、ここらでモーター チエーック！」

誰に言うでもなく、一人で楽しそうに叫んでいた。

人目など気にせずに、地面に座り込む。

モリーを脱ぎ、一つ一つ丁寧に分解していった。

「…走行距離10・3キロで、回転数が1秒間に8000万か…調子いいな」

笑顔を浮かべる。

「…さすが親父…タイヤが全然磨り減つてない……どんな加工したんだ、アイツ…」

それだけ言うと、満足そうに笑みを浮かべ、また組み立て始めた。

「到着した…今から向かう」

スーツの男がヘリから降りた。もう一人は乗つたままのようだ。

「それじゃあ、地点43で落ち合うんだな」

「ああ、人目を気にしろ…あいつらがいるかもしれないからな」

「問題ない」

それを聞くと、スーツの男がヘリから離れる。

同時に、ヘリは飛び上がり、木々の生い茂る森の上を飛んでいき、男の視界から消えた。

「……これからだ」

地面に置いた銀のアタッシュケースを持ち上げ、歩き出した。

ポケットから携帯電話を取り出す。

「……私だ、これから向かう……わかつた……通常任務に戻つていいぞ」
顔色一つ変えずに電話を終え、しまった。

「……やつぱ道変えると時間かかるな」

歩道を、自転車と同じ速度で、捺伎が滑走する。
大きな欠伸を一つして、角を曲がった、その時

「う、うわー！」

見知らぬ男性の声、捺伎は慌ててモリーを止める。

目の前に急に現れたその男を轢きそうになり、少し動搖する。

「……あ、ちょ、大丈夫っすか、おっさん！スマン、俺が余所見して
た所為で」

尻餅をついて倒れるその男性に、捺伎が手を伸ばした。

「……あ」

男性が何かを言おうとして、安堵の表情を浮かべた。

「か、彼らじやないんだな……」

捺伎の手を借りて、男性が立ち上がる。

身長は捺伎よりも高かつた。

「彼ら? なにいってんだよ…… それよりも、轢きそつこなつてマジでスマンかつた! それじゃ!」

何事も無かつたかのよう、「去らうとする。

「ま、待つて、待つてくれ!」

当然、とでも言つておこうか。捺伎は引き止められる。予期していたかのよう、「元は、捺伎はピタリと立ち止まつた。

「……な、なんすか……」

恐る恐る振り返り、男性を見た。

「……君に……頼んでもいいのか……いや……でも……」

「……はあ、怒られるのかと思つたら……いいぜ、おっさん。そんな所でうじうじしないで、俺に頼め! 借りが一つあるんだから!」

大きく胸を張る。

「……本心かい?」

「……違えーよ! 当たり前じゃねえか!」

脈絡無く、逆切れした。

「……最初に言つた言葉に、甘えさせてもいいんだね?」

「おい、おっさん。話し聞いてたか? 本心じゃねえつてのー!」

「それじゃあ……」

ズイッと体を前に出し、男性が主張する。

「……轢かれそうになつたことを警察に話しても良いのかい?」

「……くそ、人の弱みに付け込みやがつて……」

「元は君が悪いんだ」

しばしばし惱む。

確かに、どう見ても捺伎が悪かつた。これでお咎めなしさ、実に都合が良すぎる。

「しかたない。本当に頼まれてやるか……」「…ありがと！」

男はそれだけ言って、手に持ったケースを捺伎に渡した。

「これを…どっかに届けるのか？」

「逃げる…」

「はい？」

「逃げるんだ、これを持つて。いずれ渡す人が出る。それまで、これを持つて逃げ続けるんだ。誰にも渡してはいけない」

唐突だった。

「…あの…へ？」

未だに状況が理解できていない捺伎を尻目に、男性が話し続ける。

「その中身で、世界が大変なことになる。つまり、全世界がそれを狙っているんだ。国家予算など惜しみなく使ってこれを奪おうと追つて来る」

「マジかよ！」

驚きは、すぐに捺伎の思考を諦めに変える。

「俺には無理です。すいません……ってかおっさん、なんでそんなもの運んでんだ？」

「…君のその靴があるじゃないか。それで逃げ続けるんだ」

男性がモリーを指差す。

「無視かよ……といふか、充電しないと電池が切れますから」

「いいか、女性だ。渡すのは女性だ」

「だから　　」

反論しようとしたその時、遠くで慌ただしく動く人影が見えた。

「来た！逃げる少年！」

男性が叫びながら、捺伎の背中を押す。

「え、ええ！」

大急ぎで、モリーを発進させる。
すぐにトップスピードに達し、その場から消えた。

「…みくせつた。」それでいい

男が、後からやつてきた数十人の部下に話す。

「…でも、なぜあの少年を…」

「彼が、最後の逃亡可能者（E S C A P E R）なのだよ

」そう言つて、男が笑つた。

「ああ――――――頼まれちまつたあ――

捺伎は後ろを振り返ることなく、ただ渡された
ケースを抱え、道路を滑走していく。

一章（後書き）

呼んでくださった方は、最後に評価と感想を頂けると、幸いです。
賛否両論なんでも構いません。
よろしくお願いします。

三章（前書き）

遅くなりました。
更新いたします。

「…………」

にらめることは本来、子供たちが、どちらかを先に笑わせるために面白い顔をして、相手を笑わせる速さを競う遊びである。

「…………」

もちろん、今そんな事をしているのは、小さな子供でもなれば、相手を笑わせるためでもないのでは、

「…………」

と、気づいたら寝つてしまつてい。

「…………」

小さく唸り声を上げる。

「！」、こんなもの…………わあかるかあ――！」

唐突に、意味不明な言葉を口にして、再び静かになつた。

「ただいま」と

家のドアが開く。

家というよりは、倉庫に近い。外壁から屋根まで、その全てがトタンで構成されている。

「お~い、なつ~。調子どうだったよ」

作業着姿の男性が、声を張り上げる。

しばらく待つても返事がこないのを不思議に思ったのか、男性が奥まった場所にある部屋のドアを開ける。

「なつ……って寝てんのか…」

仕方ないと呟きながらため息を一息つき、いったん部屋を出る。

「いいね~ 大学生は… まだまだ気楽で」

別の部屋から持ってきたタオルを、椅子に座つて机に突つ伏してい る少年、捺伎の背中に掛けた。

「へつ、よだれなんて垂らしやがつて……」

男性が小さく微笑む

「どうせこいつのバスタオルだから… 起きたらそのまま風呂に行くだろ」

踵を返す

「まあ、幸運なことに朝までに起きれて、掛かってるのがバスタオルだって気づいたら、だけどな」

肩を竦め、ハシッと鼻で笑う。

と、その場で立ち止まり、もつー度机の上のものに手をやる。

「…なんだよ……ありやあ」

悪夢だった

真つ暗で何も見えない場所

それでも、どこか懐かしい感じがして…悲しい感じがした
誰かの声が、遠くから…本当に遠くから…微かに聞こえた
誰かの名前だ…

それは…自分の名前ではない

そつ思ひと、今度はすぐ近くで、声が聞こえた

一つではない
少なくとも…一十

ひとたび声が発せられれば、それは波紋のように広がつて行き、唐
突に消える

目の前が、急に明るくなつた

明るすぎて、純白で包まれた世界しか目には入つてこない

声も、暗闇と同時に消える

他にも色が無いか…探した…ずっと探し続けた

また暗くなつてくる…………暗闇に戻つてしまつのだらうか……

もがいた……もがき苦しんだ

そして、白が消える最中……手が何かに当たる……

同時に、暖かさを感じる……

それは、動かせた……手前に引き寄せられる

この何も無かつた世界で唯一触れられた　もの　だ

慌てて手繰り寄せる

何なのか、見てみたかった……一人から……抜け出したかった

そして、白は一抹の筋になる

それを、白と言つ名の光……暗闇に捕らわれない存在に、当てた

見えたものは……赤かつた

自分の生首が白目を剥き、何かを言いたそうに小さく口を開け、こ
ちらを見ていた

だは？！

瞬間に自覚め、自分の今いる状況を確認した。

「……ああ……寝ちまつたのか……」

椅子に座ったままの探偵が、ふと腕をなでおろし、髪を搔いた。

そのまま、少し考えた

「新父が帰ってきたのか？」

たるそばに椅子から立ち上がり 大きく伸びをする
節々が痛い。椅子で寝てしまつたせいだ。

机に目がいつた

111

「またまた眼ぐで細くた

お腹の底から声を出す

そのまま机に手を突き、机の下を見、部屋中を見、鞄の中を見て…

吉屋を防ぐ見て回り

「な、
無い
…
」

頭を抱える。

そして

「ま、いいか」

開き直った。

「どーせ無理やり頼まれたもんだしな。

俺を追つてきてるって奴がこつそりと持つてつたんだらう。うん」
一人で勝手に納得し、部屋を後した。

と、ドアを開けたところで、父親と鉢合せになってしまった。

「お、起きたか捺伎」

「親父も今起きたのか？」

目を合わせずにすかさず聞く。

「いや」

という返答に、捺伎が父親の方を向いた。「俺は昨日の夜から寝てねえ。

お前さんが持つてきた変なもんをずうつずうつと見せせてもらつてた」

返答に迷つた。

「…俺何か渡したつけ？」

「いや、勝手に取つてつた」

そして、ポケットから出したそれを見せた。

緑色、どちらかといえば翡翠に近い色だ。
反対が見えるほどに透き通つてゐる。

しかし…その形はどう見ても単三乾電池だった。

「ん…んー…あ…あ～～～～～！」

父親のその手から、翡翠のそれをひつたくる。

「お、親父てめえ…」

「なんだ、何か大事なものだつたのか？」

「だいじつーか何つーか…大事なもんだ」

嘘八百

「そ、うか……ん、で……これなんだ?俺が見たところ……結論は良く分からぬ

からぬ

ものとして可決されたんだが」

捺伎がキヨトンとする。 そ、ういえ、ば、 昨日もそれが分からぬまま寝てしまつたんだ。

まさか、 こ、の機会ヲタクの親父にも分からぬなんて……

「んー……」

暫しの黙考

後に訪れる“よく分からぬもの”というフレッシュテル

そして決断

「電池だ……見た目通り」

文字通り、この場合見た通りであるうか。 横着な決断をした。

「……そ、そ、うか」

父親が意外そうな顔をする。

そして、すぐに口を開いた。

「やつぱり……思つてた通りだ……」

「……く」

どうやら聞いてみる必要があるみつだ。

ヘリコプターが海上を旋回している。

すぐ下あるヘリポートには、すでに別のヘリコプターが着陸してい
た。

切り立つた岩場の上に、建物からまっすぐに伸びるその道は、人が二人並んで通るのがやつとなほど、細かつた。

降りた男たちは、かれこれ三十分戻つてきていな。

「…下の奴らはまだかよ…燃料切れちまうぜ」

パイロットが愚痴をこぼした。

後ろに振り返り、そこにあるものを見た。

黒い棺

その蓋には、大きくティアラが描かれている。
他に乗組員はいない。孤独である。

「…これって…やつぱり死体なのか」
胸の前で十字を切つて、小さく祈つた。
と、下のヘリポートに人影が現れた。

手には誘導灯を持つてゐる。大きく手を動かし、何かを伝えていた。
手旗信号だ。

「ん…反対側の格納庫に入れ…か。おせーんだよ。つたく…」
悪態をつきつつも、その指示に従う。

「長旅ご苦労様です。これはお駄賃とでも思つてください」
執事のような身なりの老人が話す。

無事に格納庫に入れると同時に、周囲を銃を持つた男たちに囲まれ、
積荷だけ
降ろされる。

積荷は荷台に乗せられ、奥へと運ばれていった。

「…あ…あのわ」

パイロットが周りの男たちを指差す。

「ああお気になさらずに。積荷が積荷ですので」

駄賃といって手渡したスープケース一杯のお金。

ただは運ぶだけでこの金額は、さすがに不安だ。

「それと…本当にこんなに貰つちまつてもいいのかよ」

パイロットが何度も聞く。その度に積荷が積荷ですので、とあしらわれる。

「…そりか…ま用が済んだから、俺はこれで帰らせてもらいますよ」

「はい。お気をつけて」

そう言って、ヘリが飛び立つた。

格納庫を出る。

また、広大な大海原の上へと出た。

「…はした金。悔いは無いとおっしゃっていました。
こんな古典的で、美しくないやり方ですが……少しでも手がかりになるようなものを
残しておいては、いけませんからね…」

パチンと、指を鳴らした。

同時に、ヘリコプターが大爆発の後に砕け散る。雪のように、燃えるお金が降つていた。

その炎は、青かった。

「まだ改良の余地ありですね…もう少し融合密度を上げても、然程放射能は拡散

されないでしょ。まさしく、一石二鳥…重ねて感謝します…そして、さようなら」

執事が周りの男を引き連れ、格納庫を後にした。

格納庫の先は、まるで中世の城そのものだった。

赤いカーペットの敷かれた絨毯。

壁には様々な絵画が飾られている。

所々にあるドアも、彫刻で彩られている。

「ヴィヴィス、積荷が届いたと聞いたが」「貴族の格好をしたような男が、歩いてきた。マントをひらつかせ、腰には細剣をさしている。まだ若く、容姿も中々のものだった。

「ああエルサイオル卿。今お部屋に伺おうと致しておりましたのに

「いい。我輩は早く会いたいのだ」

「…ただいま用意されたお部屋へと運んでおります。メイドのものが着替えをさせておりますので、暫しお待ち」「あの部屋に居るのだな、よし分かつた」

「え、エルサイオル卿！」

「直接会いに行く。爺は晩餐の仕度だ」「…御意に」

パンツ、と大きな音を立てて、ドアが開く。

莊厳な世界が広がった。

歴史の教科書に出てくるような、貴族的な部屋が広がる。それには、何か圧倒されるようなものがあった。

中に居たメイド達が、そそくさと出て行く。

「おお、会いたかったぞ」

エルサイオル卿の目線の先。そこに居たのは、まだ幼い少女だ。

歳は12～3程度だろう。

ピンクのドレスに身を包み、俯いていた。

長いブロンドの髪が、光で輝いていた。

エルサイオル卿が両手を広げ、少女の元へと歩み寄る。

それに気づき、怯えたように天蓋つきのベッドの方へと逃げた。

「…我輩を知らないか…まあ、初めて会ったのだから無理も無いな…アミティ…」

少女がハツとする。

エルサイオル卿の顔を見た。

「ん～、美しい。やはり私の目に狂いは無かつた…」

軽く頬を赤らめ、アミティがまた顔を背ける。

「…不安かな…」

エルサイオル卿が聞く。

「君は我輩について何も知らないが、我輩は君について何でも知っているのだよ」

近くにあつた椅子を取り、座つた。

「ロク＝ケリームス＝アミテルシア。故ロク＝ケリームス＝トクスラット殿下の愛娘。

殿下…大統領の方が良いかな…今や君を知らないものは、この世界中で居ないはずだ」

アミティが俯いたまま聞く。

「…その特異な遺伝子から、君は世界中の人都から追われるようになつた。

しかし、殿下の手元に居るため、誰も手が出せなかつたがな…」

エルサイオル卿が立ち上がり、アミティに近づく。

「ある日、殿下の部下に謀反者が生まれた。それにより、殿下は暗殺……」

残った君は一人で逃げることになった。しかし、その顔は既に知れ渡つたもの。

たとえ貧しい庶民であつても、捕まえて金に換えようとする始末だ」

アミティの肩が、小刻みに揺れた。

頭に、エルサイオル卿の手がポンと置かれる。

「……逃げて逃げて、最後は我輩の依頼主に捕まつた……よくもまあ、三週間も逃げ切れた

ものだ。感心しよう」

一息つく。アミティが泣き始めてしまつたせ이다。

「辛かつたろう……もう安心しろ。我輩が責任持つて

エルサイオル卿が、話を切らす。

そして、アミティの顔の近くへと耳を寄せた。

「…………」

「……もう少し、大きな声で話してくれないか……」

「……うして……とうさま……るされ……」

嗚咽でかき消される言葉を理解したかのように、ルサイオル卿は笑みを浮かべる。

「どうしてお父様は殺されてしまったのか……いたつてシンプルな質問だ」

大きく笑う。それは、嘲笑に近かつた。

髪の毛を力いっぱい引っ張り、顔を天井に向かせる。

「あなたのその目、その目ですよ！」

突然、口調が変わつたかのようにエルサイオル卿が吼える。

「片側だけ、あなたの目の片側だけ、その力が欲しいのですよ！」

アミティの琥珀色の右目と、翡翠色の左目から、大粒の涙が零れた。

燃料電池というものがある。

水素と酸素から電気と水を作り出す、クリーンエネルギーだ。この社会では当たり前に使われているが、何年か前までは新エネルギーとされ、高級品扱いされてきたものだ。

「……こんなちつこいものに、そんなもん詰め込めるのかよ」「だが、俺の目に狂いはねえ……かもな」

「自信ねえのかよ！」

と、見事につまらない親子漫才を繰り広げる、捺伎とその父親。父親の部屋に捺伎と二人、机の前に立ち竦み、作業をしていた。

周囲は機械で埋め尽くされている。

それは、小学校の理科の実験で使つよくなものから、大学院の専門家でも使わない

ような代物まで、その種類は多用だ。

おかげで、部屋の中には1畳分のスペースしかない。

「んでもな、みてみる」

父親が近くにある電圧器を指差した。

「……これは……見事だな……」

捺伎も感嘆する。

「ああ、見事だ……」

電圧器の針は、見事に振り切れ、取れていた。

父親は無言でその電圧器に針を付け直す。

「こんなに電気を詰め込むことは、物理的……いや化学的に不可能だ」「いや、科学な……って言葉だけじゃ伝わんねーけどさ……」

「……要は、こいつは常に自分自身で電気を作り上げてるってわけだ」

人差し指をピンと立て、得意げな顔をする父親。「つまり、こいつは電池だ」

「いやいや、意味わかんねーから。何だよ、つまりこいつは電池だつて。

自分で電気を作ってるからって、それは電池じゃねえだろ」「激しくツツツコミを入れ、勢いよく反論する捺伎。

それでも、父親の方は相変わらず得意げだ。

「実際、乾電池ってのは、電流が流れないと電気を発しない。

それに、親父の理論から言つと、電気うなぎも電池だぞ」

「…………」

その比喩に、しばし考え込むと

「……しまつたー。そうすると雷雲も電池になつちまつー」

などと一人で叫んでいた。

「これで……いいか……」

額に浮かぶ汗を拭い、満足そうな顔を浮かべる父親がいた。

「…………あのな……親父」

「おう、終わつたぜ！」

ぐつと親指を突き出し、ガハハと大声で笑つた。

「いや……あのな……」

「なんだ？不満なのか？」

頭に疑問符を浮かべ、わななく捺伎を覗き込んだ。

「窒素充電式小型内蔵電池を、通常の単三式電池対応のシャトルに置き換え、万一千中身を見られても一目じゃ分からぬように、電池そのものを一段式にして、片側で計三本を使って

「聞いてねーよ…………あのな、なんで俺が怒つているか分かるか

」

？」

「……ああな。お前のモリーを勝手に改造したことか？」の電池で走れるよつこ……」

捺伎の体に溜まった怒りが、拳に集まる。

「……それはな……」

「……それは……なんだ？」

「俺が……俺には今日講習があるとこつこつだ——」

強烈な一撃が父親に入つた。

「ふう……いやあ……お待たせさせてしましましたね」

「……いえいえ、お構いなく」

「構りますとも……大事な客人なんですから」

「ふつ、エルサイオル卿にそんな事言われると、皮肉にしか聞こえませんね」

「おやおや、ご挨拶ですねえ……」

少々狭い部屋……とは言つても、それは彼らのこる部屋以外と比べているからであり、実際は、三十畳ほどの広さのある部屋。

そこにいるのは、二人。

一人はエルサイオル卿。もう一人は、捺伎にアタッショケースを渡した男だ。

「ちょっとばかり荷物が届いたものでしてね、急ぎの確認が必要だつたので……」

「ああ、もう良いんですよ。今こいつして話せてこいるのですから」

「… そうですか…… では、本題に入りましょ」

エルサイオル卿が右手の指をパチンと鳴らした。

同時に、ドアが開き、執事が入ってくる。

「御呼びでしようか…」

「ここの間届いた、あの紅茶… 何て言つたか… あの紫の

「ジヨルオンガルルーバですか？」

「ああそれだ。 それと、適当な菓子を頼む」

「御意に」

静かにドアを閉め、執事がいなくなつた。

暫く、静寂に包まれる。

静かにドアを閉め、執事がいなくなつた。

「… 確かに造つてきましたよ、ここの一つの薬……」

その均衡を男が破る。

手元にあつたかばんから、オレンジの小さな巾着袋を取り出した。

「流石ですね、我輩の無理を実現させてしまつなんて…」

その小さな巾着袋を、田の前の机に置く。

「苦労しましたよ、ここの一つは… なんせ、実験対象が動物ですからね。

効果の程が今一つ分かりにくいのですよ」

「… なんだ、人体実験はしていなか……」

当たり前と言つよつに、エルサイオル卿が言つた。

「…………」

「… 何か言つたそつな目をしているな……」

ガチャつとドアが開く。

男が話そつとした時、ちょうどこいつタイミングで

「失礼致します。お茶とお菓子をお持ち致しました」
執事が入つてくる。

テーブルの上に、すばやく物を置くと、そそぐれと出て行った。

エルサイオル卿が一口啜る。

「……ふむ……興味深い味だ……」

それを聞いて、男も一口飲んだ。

「……ほほう……なるほど……」

一体どんな味なのは、まったくわからない。

二人はその味に興味を示し、そのまま飲み続けた。

「それでは、用は済んだので、私は帰らせてもらいますよ」
男が目の前に出されたお菓子と紅茶を全て平らげ、席を立ち上がる。

「おや、そうですか……特に主な話もできませんでしたね」

ドアノブに手を掛け、少しまわした。

「世間話をする様な柄では無いでしょ？」

「ふふふ、まあ、そうですな……」

「ああ……一つ話しておくれのなら……」

思い出したように、男が振り返った

「我々の姫は、くれぐれも丁重に扱つて下さい」

その一言で、部屋の空気が凍りつぐ。

一瞬にして、二人の間に亀裂が生じる。

「……今、なんと……」

「我々の姫、アミテルシア様を丁重に扱つようにとお願いしたので

す

「……」

「分からぬ」と思いましたか？この私に

「…それは、この我輩の城の造りを知つてのことか…」

「ええ、此処に来るまでに一通りの装置は確認できました」

ドアノブに掛けた手を離し、エルサイオル卿を見る。

「断崖絶壁の場所に建てられた忌城。海に囲まれている為、侵入・逃亡と

共に不可能

「……」

目を細めて、エルサイオル卿が男を見る。

「仮に船や飛行機で此処から抜け出せられたとしても、一番近い陸

までは

軽く200キロはある

「…どうやら、理解はしている」様子だ

「ふつ…殺氣を隠せないのですねえ…殺されでは困るので、これで失敬」

卑屈な笑いを残し、男がドアを開ける。

「待て」

エルサイオル卿のその言葉に、一旦止まる。

「…姫が此処にいると、なぜわかつた…」

体半身外に出し、再度振り返る。

「…分かるんですよ…私たちには…」

「彼女の目の力の事か…」

「……ご想像にお任せします」

「つひや———..」

玄関をものすいじ速さで飛び出し、捺伎は駅へと急いだ。
もちろん、線路を使って自力で大学に行くためである。

「……けつ、行つてきますも無しかよ」

父親が、小さくなつていく捺伎の背中を見つつ、悪態をついた。

「……何にも起きなきや良いんだがな……」

腸道から捺伎のすぐ後ろをつけていった集団を見ながら、ため息を
ついた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6973f/>

EScaPE

2010年10月28日04時20分発行